

David Harvey, *The Limits to Capital* (1982) について

平 井 規 之

(1)

本書の著者、ディヴィッド・ハーヴェイは経済地理学を専攻する現在ジョージ・ホブキンス大学の教授であり、資本主義のもとにおける都市化をめぐる諸問題の分析でつとに知られてきた人である。彼の前著、*Social Justice and the City* (1973) は資本主義のもとでの都市化を通して生ずる不平等化とその背景を論じたもので、実は、この著書によって彼は早くから国際的に注目されてきた。彼のこの前著は経済地理学ないしは人文地理学にマルクス主義的アプローチを適用しようとした比較的早い時期の試みとしていまなお影響力のあるテキストであると評価されている(キアンズ [4], 411 ページ)。この前著においてハーヴェイはリベラルないしはラディカル一般の立場からマルクス経済学の立場に移行した。

ここでとりあげる本書は、前著の発表以後の10年近くにわたる彼の思考の更なる営みの産物として出てきたものである。本書は彼のこの営みが実りあるものであったことを示している。

ハーヴェイにとってこの思考の営みの出発点となったのは、言うまでもなく、みずからが取り組んでいる経済地理学上の諸課題をマルクスの理論的パースペクティブの中に位置づけようとする意図であった。本書のタイトルは『資本にとっての制限』ないしは『資本の限界』とでも訳しておけばよいであろう。彼が最もヘヴィに依拠しているマルクスの著作は、『資本論』全3巻と『剰余価値に関する諸学説』と——言うまでもなく——『グレントリッセ』である。彼のテーマに近いものとしてエンゲルスに『イギリスにおける労働者階級の状態』という先駆的な著書があり、『住宅問題』というかなり興味ある論説もあるけれども、経済地理学者ハーヴェイの心を捉えたのはやはりマルクスであった。マルクスの思考を追体験して自己の視野を拡大しようというのが著者のこの10年間の営みであった。

ところで、ハーヴェイが経済地理学者であるからと言って、本書はマルクスにおける経済地理学的叙述を拾い集めて構成したという類いの著書ではない。どだいマル

クスの残した著述にその種の経済地理学的分析の断片がそう豊富にありえようはずもない。経済地理学においてはマルクスの著述からの抜き書きを集めて一書をものしようになどという試みは最初から出来ない相談なのである。

それよりも何よりも本書は経済地理学プロパーの著書ではない。本書は「時間」とか「空間」とかいう概念によって資本主義経済を切ろうという著作そのものではない。言い換えれば、ハーヴェイの好む用語である「空間配置」(spatial configurations) そのものについて理論的に展開しようとした著作ではない。評者はそもそも経済地理学を専攻しているわけではないから、本書がもしそのような経済地理学上の専門書であったとしたら、本書にあえて取り組むことはなかったであろう。ともあれ、本書においては、「時間」と「空間」を投入した経済地理学的叙述が登場するのは全体の紙幅の2割以下にすぎないのである。

著者自身、本書の内容について次のように述べている。すなわち、本書は、「つくられた環境(built environments)における資本の流通、信用制度および空間配置にとくに注意を払ったマルクス理論一般についての論作である」(xiii-xiv ページ)。こうした著者自身による本書の特徴づけから分るように、本書は基本的にはマルクスの経済学体系についての——さまざまな論争をふまえた——自己了解の書物であり、それに経済地理学的観点が若干加味されたというべきものである。この後者の側面についてはのちに触れるが、ともあれ、ここで強調されるべきは、本書が基本的には著者の言う「マルクス理論一般」についての労作であるということである。だから、本書についてかなり長い論評を書いているウルフは次のように評して本書の性格を表現している。「この狭隘な専門化の時代に、専門家の専門性の通例の境界を越えたこのように大胆な公刊物を見ることは好奇心をそそられることである」([7], 81 ページ)。

(2)

そこでまず本書の内容について章を追って紹介することにする。第1章はもちろん資本主義のマルクスの分析

の土台についてのハーヴェイの理解の提示である。それは言うまでもなくいわゆる商品論であり、労働価値論であるが、ハーヴェイの意図は資本主義をその経済的諸関係と諸原則において把握し、定義するところにある。だから、労働価値論は階級諸関係と蓄積の諸原則と切り離しがたく結びつけられて、資本主義的生産様式の基本原則として提示される。

第2章では資本主義的生産と分配の構造および賃労働の本質の分析がおこなわれる。ここでは賃金率をめぐる階級闘争だけでなく、商業資本、貨幣資本、地代が論じられる。第3章には消費過程が導入され、ケインズとカレツキーを明らかに意識した有効需要論についてのマルクス解釈が提出される。

第4章では、技術変化と労働過程が論じられる。マルクスの技術論は、きわめて楽観的な、ヴィクトリア王朝的なはなやぎのうちに与えられている。万国博に展示されたアメリカ製の「封筒製造機」を見たときのマルクスのはしゃぎようを想起すればよい。

つまり、マルクスにとっては、技術は科学の発展と共に自動的に進歩するものであり、それを生産過程にいかにか適用するかというのが資本主義経済にとっての問題であった。しかもマルクスには、シュンペーターが「創造的破壊」なる概念でマルクスから——盗んだとは言わないけれども——借用した「特別剰余価値」なるアイデアがある。資本主義的競争が新技術の導入競争とならざるをえないことは価格メカニズムそのものが強制しているというのがマルクスのアイデアであった。「イノヴェイションか消滅か」——これが資本主義にとっての至上命令なのである(133ページ)。ハーヴェイはこの問題に一方では階級関係によって——つまり、相対的剰余価値を求めての労働過程の永続的再編への強制によって——、他方ではそれがもたらす資本主義経済への攪乱的効果を通して接近する。

第5章は、資本主義的生産組織の変遷を取扱う。生産の組織の変遷という論題からして、この章はチャンドラーにヘヴィに依拠している。ところで、ここで興味深いのは、ハーヴェイが、市場における集中ではなく、むしろ非集中化と集中とのあいだの矛盾に注目していることである。第5章の冒頭でハーヴェイは言う。資本主義の「独占」資本的形態とか「金融」資本的形態とか「国家＝独占資本主義」とかいう用語が経済組織の新しい形態を描写するために使われているが、「私は、以下では、それにつけられるラベルに特に思いわずらわされることなしに転移のプロセスを分析することに努めたい。この

ようにして、マルクスの価値論と両立する組織的転形の解釈を確定し、それによって、マルクス主義の文献にさまよっている多数の幽霊を眠りにつかせようと望んでいる」(138ページ)。

第6章と第7章は、蓄積、再生産および恐慌について論じている。これについては、のちに、別の文脈において述べることにする。要するに、個々の資本家的経営者にとっては合理的な行動が資本主義経済制度全体にとってはいかに攪乱的となるかという矛盾がハーヴェイの本書を通じての問題関心であり、この章はそれを本格的に取りあげたものである。

第8章、第9章および第10章は、固定資本論とわが国でいう金融論を論じたものである。固定資本の分析では、「つくられた環境の諸要素」というものを導入している部分(232-235ページ)が興味深い。経済地理学者ハーヴェイの面目躍如たるものがある。固定資本という概念は、言うまでもなく、「空間」上の移動不可能性とは関係のない概念である。汽船や汽車は、立派に動くけれども、固定資本である。他方、やや古い話であるかもしれないが、水力のような流動資本は動かないままにそこにある。川の落差があるところでなければ、水力は水力とならない。ところで、そのことを確認したうえで、固定資本は「つくられた環境の要素」とならざるをえない。つまり資本の新たな動員ないしは資本の移動は、この「つくられた環境の要素」としての資本がこのエンヴァイロンメントの一部ではなくなり、その限りにおいて消滅し、それと共にまたそれに体化されていた価値の破壊を伴わざるをえないというのがハーヴェイのここでの強調点である。もちろん、資本蓄積の理論的展開においては、このような観点は必ずしも必要ではないであろう。しかし、例えば、特定の時点での特定の国や地域における景気循環を分析するさいには、この観点は重要なものである。資本の動員ないしは移動を「空間」の見地から位置づけたところに本書の貢献の1つがある。

さて、ハーヴェイは、その次の金融論において「時間」を導入する。評者は金融論について云々できる資格をもっていないのでここでは論評を省略するが、マルクス研究の英語文献でここまで詳論した労作はめずらしいのではないと思われる。

最後の3章は、経済地理学をトータルに導入している。言うところの「つくられた環境」の詳説である。この部分には注目に値する注がある。彼は以前の論文を引用しつつこう述べる。「空間は、それ自体絶対的でも、相対的でも、関係的でもなく、環境によってそのどれにでも、

また同時にすべてにも、なりうる。空間の適切な概念化の問題は空間に関しての人間の実践を通して解決されるのである。私は依然としてこの見解を保持している」(339 ページ、注 5)。のちに述べるように、ハーヴェイのこの著書が、資本主義経済をその生産関係において徹底的に把握しようとしたのはなぜかの理由の 1 つがここに与えられている。

(3)

ハーヴェイは開巻冒頭の「序説」でこう述べる。「マルクスを研究する者は誰でもこの経験について一書をものしたいという思いにかられると言われている。私もこのような命題の部分的証明として本書を提供する」(xiii ページ)。

このような書き出しが予想させるのは、本書がマルクスの経済理論のおもしろくもない祖述であり、要約であるにすぎないものであるということであろう。そのような著述はすでに市場に満ちている。しかし、本書について何よりもまず言える特徴は、与えられた問題に正面からぶつかり、できる限りにおいて自分自身の見解を打ち出そうとする著書の姿勢である。先に、本書が著者の自己了解のための著述であると言った所以はそこにある。

いくつかの例を挙げて著者のこの姿勢を紹介しておこう。第 1 に、価値論についてであるが、著者は相対価格や社会的生産物の分配のルールといった問題をどうでもいいものと考えているわけでは決してないけれども、価値を「純粋の計算概念」(35 ページ)として解釈しようとする——著者の命名によれば——‘linear’な立場を著者は拒否する。誰かある人がやってきて、価値の生産価格への転化についてのコンシスタンスをめぐる論証のゲームに参加することは勝手であるが、問題は、なぜ、いかにして、資本主義のもとにおける労働が現在とっているような形態をとっているのかにあるというのがあくまでもハーヴェイにとっての価値論の課題である。だから、価値論への言及は本書の最初から最後まで執拗におこなわれる。ハーヴェイにとって価値論の取扱いは冒頭の商品論だけで終わるものではない。「商品交換によって、貨幣的諸関係によって、労働の社会的分業によって、生産の階級諸関係によって、仕事の内容と産物からの労働の疎外によって、至上命令としての‘蓄積のための蓄積’によって課される規律は資本主義のもとにおける人間の労働の真の達成と限界とをわれわれが理解する助けとなっている」(37 ページ)。「理解されるべきパラドクスは、1 つの過程としての生きている労働の自由と一過性が、

ものと、またものともとの交換比率の固定性とに、いかにして客体化されるかということである」(同上)。

ちなみに、こうした論調に看取されるように、ハーヴェイはかなりの程度現代フランス・マルクス主義の展開の影響を受けている。外国文献は英語に翻訳されたものしか知らないように見える現在のアングロ＝サクソンの経済学者の世界においてその限りにおいて目の行きとどいたこのような労作が刊行されたこともまた注目に値することであろう。

第 2 に、ハーヴェイは、マルクスおよびマルクス以後のマルクス主義者の思考のうち、自分自身で納得できないものについては徹底的に考えようとしている。ここでそれらのケースの 1 つだけをとりあげて詳論しても本稿の紙幅を超えてしまうであろう。そこで、とりあえず、1, 2 のケースを例示しておくことにしたい。

例えば、マルクスが提起した資本の技術的構成、価値構成、および有機的構成の内容における「かなりの混乱」(126 ページ)について考察した箇所を挙げることができる。マルクスのこのアプローチは、量としての資本と資本/労働比率を、言ってみれば、リアルとマネーとの両方のタームズの統一において把握しようと思図したものであろうし、その限りでまことに魅力的なものであるが、そこにおける内的首尾一貫性を徹底的に問わねばやまないハーヴェイもまた魅力的な著作家である。

あるいはまた「金融資本」というわけの分らないアイディアについてもハーヴェイのしらみつぶしの再検討の眼をまぬかれていない(第 10 章)。もちろん、マルクスに「金融資本」というアイディアがあるわけではない。それはヒルファディングと、とりわけレーニンが普及させたキーワードである。しかし、ハーヴェイは、そのことを認めたくえで、マルクスが「さまざまな種類の貨幣資本の流通過程についてたいして理路整然としているとは言えない書き物を残している」(283 ページ)としてこのアイディアの検討に入る。この切り口、この書き出しが、ハーヴェイのこのたびの著書の魅力である。

ハーヴェイのこのような思考のあり方のためか、気の早い人は、彼の『資本の限界』というこの書物は「マルクスの限界」についての研究であるといった評論を提出する始末である(クラーク [1], 447 ページ)。

(4)

さて、ハーヴェイが本書に『資本の限界』とでも訳されるべきタイトルをつけた基本的な理由は何であったかを考えてみれば、それは彼が本書においてわが国で「恐

慌論」と呼ばれるテーマを展開しているからであるように思われる。本書は、例えば、ケインズが短期の現象と政府政策によるその安定化にとりくんでいるのに対してマルクスは長期のダイナミクスと資本主義の内的論理にかかわっているが、ケインズを長期に、マルクスを短期に入れ替えれば、実りある比較ができる(78ページ)といった叙述のいわゆる asides においてもわれわれを刺激するものをあまた与えているが、骨格をなしているのは、何といってもまず、この「恐慌論」についての叙述の流れであるように思われる。

もう1度確認しておけば、本書は「マルクス理論一般」についての自己了解を述べた書物であり「恐慌論」そのものを展開しようとした著書ではない。しかし、そこには、体系の筋道を資本主義の「危機」ないしは「恐慌」形成によって一貫させようとする意図が確かに見てとれる。それは著者が本書の叙述の中にクライシスに対する「3つの切り方」(three cuts)という視点からの叙述をいわば段階的に本書全体で言及しているからである。

恐慌論についてのハーヴェイの「第1のカット」は利潤率の低下法則に求められる。彼がそれを恐慌論の1つの要素とみるのはそれが「資本主義の内的矛盾の基底にある源泉」(425ページ)を取り扱っているからである。彼にとって、「この法則の理論的意義はかなりはっきりしている。資本として流通している総価値に比較しての剰余価値の生産可能性は、個々の資本家が剰余価値の追求のなかでおこなう技術革命そのものによって長期的には減少するということである」(180ページ)。この利潤率低下法則の導入にさいしてもハーヴェイは月並みな解説家ではない。彼はまず「反対に作要する要因」のなかから、「外国貿易」と「株式資本」を排除する。さしあたりマルクスは一国封鎖モデルをもって考察していたはずであるし、分配形態のいかんを問わない剰余価値概念をもって考察していたはずであるというわけだ。こうして、ハーヴェイはたえず「体系」としてマルクスの理論を彫琢しようとする。「最初にまず、いわゆる「法則」としてのその正確な地位が明確にされるべきである。例えば、もしも利潤率の低下に向かう傾向があるとすれば、それが資本主義の全体としての運動法則と両立する仕方では説明されなければならないが、このことと、マルクスがしばしばきわめて断定的に主張しているように、この法則が実際の利潤率の現実的かつ歴史的趨勢を説明すると同時に資本主義のダイナミクスの内的論理を捉えていると主張することとは全く別問題である」(180ページ)。

「第2のカット」は、貨幣・金融論において与えられる

(第10章第IX節)。ここでは資本が商品ないしは貨幣として現われ、価値のアイデンティティが独自の形態としての貨幣形態で表現されることから、恐慌は貨幣的表現をとらざるをえなくなる。この「第2のカット」は生産そのものにおける不均衡への傾向についての以前の分析に貨幣的金融的観点を統合しようとするものである。

ここで興味深いことは、擬制資本の導入によって、ハーヴェイが景気循環におけるその都度の投機が歴史的に独自なものであり、景気循環を通しての資本主義の歴史的発展を見なければならぬと指摘していることである。こうして、著者は、景気循環の一巡を通して資本主義経済がシステムとして旧に復するというマルクスにもしばしば看取されるモデルを拒否する。彼によれば、「自分自身を内部から転形させる能力が資本主義をやや特異なものとしている。資本主義は、カメレオンのように、永続的にその色を変え、蛇のように、周期的にその皮を抜き捨てる」(327ページ)。

ハーヴェイにおける「第3のカット」はローザ・ルクセンブルグに似た帝国主義論への接近である。もっともローザの場合は非資本主義的空間なしに剰余価値の実現は不可能であるという理論であったが、ハーヴェイの場合には「空間」を投入することによって、地域的不均等発展、資本と労働の「空間」を通しての移動などを通して過剰投資のあり方のダイメンジョンを一層深化・拡大しようとする意図をもっている。そして、この部分も、経済地理学者ハーヴェイの面目躍如と言える部分である。

以上、本書は、すべて「自らの言葉」を刻み込もうとした労作として、とくに若い研究者を引きつけてやまないであろう。

(一橋大学経済研究所)

Book Reviews

[1] Clark, Gordon D., "Annals of the Association of American Geographers," Vol. 73, No. 3, Sept. 1983, pp. 447-449.

[2] Gibson, Katherine D., "Australian Geographical Studies," Vol. 23, No. 1, April 1985, pp. 188-189.

[3] Ian Hamilton, F. E., "Economic Geography," Vol. 60, No. 1, Jan. 1984, pp. 85-86.

[4] Kearns, Gerry, "Journal of Historical Geography," Vol. 10, No. 4, Oct. 1984, pp. 411-417.

[5] Shaw, William H., "American Historical Review," Vol. 88, No. 5, Dec. 1983, p. 1243.

[6] Tiver, Leonard, "Political Studies," Vol. 31, Sept. 1983, p. 531.

[7] Wolff, Richard D., "Economic Geography," Vol. 60, No. 1, Jan. 1984, pp. 81-85.